

大学生の居場所の意義
——スクールカーストの悪影響の解決

小原 一馬, 川崎 詩織

宇都宮大学教育学部研究紀要 第69号 別刷

2019年3月4日

大学生の居場所の意義

——スクールカーストの悪影響の解決

The effects of IBASHO (physical/psychological comfortable space) for
university students
—Solution for the long range bad influence of clique hierarchy of middle school

小原 一馬[†], 川崎 詩織^{††}
KOHARA Kazuma, Kawasaki Shiori

概要 (Summary)

中学から高校でのスクールカーストにおいて低い位置におかれてきた生徒は、大学生になってもなかなか積極的になれず、人間関係に関しても不安感を持ち続ける傾向が見られる。こうした問題を解決するため、大学で所属している学科等とは別に、承認的な、あるいは橋渡しの居場所があることの効果を検証した。積極性に関しては両方の種類の居場所に効果があることが示されたが、人間関係の不安感については、それぞれ効果があるかどうか、曖昧な結果となった。

キーワード：居場所、スクールカースト、橋渡し型ソーシャルキャピタル

1 これまでの研究の経緯

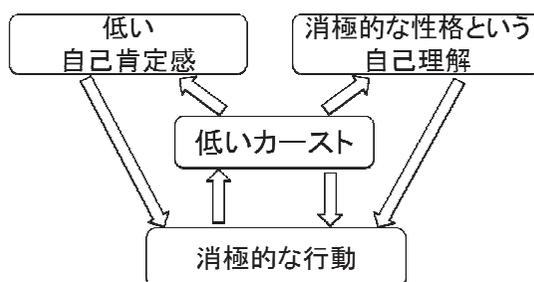
1-1 スクールカーストの悪循環

これまで私たちは、スクールカーストが引き起こす悪循環について明らかにしてきた（小原、平山2017）。

スクールカーストとはクラス内がグループに分断され、かつそのグループ間が人気に基づく序列と権力関係におかれている状態を指す（森口2007、鈴木2012）。私たちが宇都宮大学教育学部で行った調査でも、クラス内のグループのメンバーが固定され、グループ間の交流が少なく、グループ間の序列がはっきりしているほど、「スクールカーストがあった」と認識されやすいことがわかっている（小原、平山2017）。

このようなスクールカーストがもたらす悪循環は次のような図で整理できる。

図1 スクールカーストの悪循環



スクールカーストで低い地位におかれると、上位のグループからのプレッシャーで目立った行動を抑制されるだけでなく、低い自己肯定感と消極的な性格という自己理解を導くことによっても行動が消極的になる。その消極的な行動は低いスクールカーストを正当化するだけでなく、進級したり進学して人間関係がいったんリセットされてもまた低いカーストに位置づけられてしまうという悪循環を描く。つまり、地位の再生産が起こるとのことだ。

しかし小原、平山（2017）の調査ではこのような悪循環をどのように解決したら良いかを示すことができなかった。中高のスクールカーストを経験して低下した自己肯定感は、（用意した質問の範囲内では）何をしていても低いままだった。たくさんの友人ができようと、大学の生活が充実していようと、趣味の活動に打ち込んでいようと有意の影響は見られなかった（小原、平山2017）。ただし、大学の三年生になった頃には、自己肯定感にスクールカーストの影響は見られなくなって、ただ趣味の活動に打ち込んでいるかがある程度の影響を与えていた。しかしその影響は小さく、どのようなことをやっていたらスクールカーストの影響をより早く脱することができるのかはわからなかった（小原、平山2017）。

そこで、新しい仮説に基づいて調査が行われた。それは学校外に居場所があることによって、こうしたスクールカーストの悪影響がやわらげられるのではないかという仮説だ。

1-2 居場所の新しい効用 橋渡し型人間関係に基づくソーシャルキャピタル

小原、川崎（2018）の調査では、中学・高校における学校外の居場所の効用として、広い意味での承認に関わるものとは異なるものを示した。

心理学において、居場所の効用はこれまで次のようなかたちで整理されてきた（原田・瀧脇 2014）。

社会的居場所（広い意味での承認）

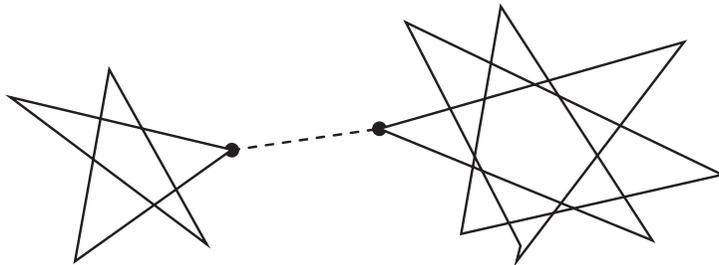
- 承認（能力の発揮、役割）
- 受容（ありのままの自分を愛される）
- 所属（属している）

個人的居場所（一人きりになれる）

- 解放（現実社会からの逃避）
- 内省（自分を内省し、再構成する）

しかしこのような居場所観に欠けているのは、新たな人間関係を広げていくという観点である。人間関係を広げていくことの積極的な効果については、ジンメルからずっと社会学の中に根づいているが、最近では二種類のソーシャルキャピタルとして、表現されている（Gittell and Vidal 1998、図2）。

図2 結束型と橋渡し型のソーシャルキャピタル

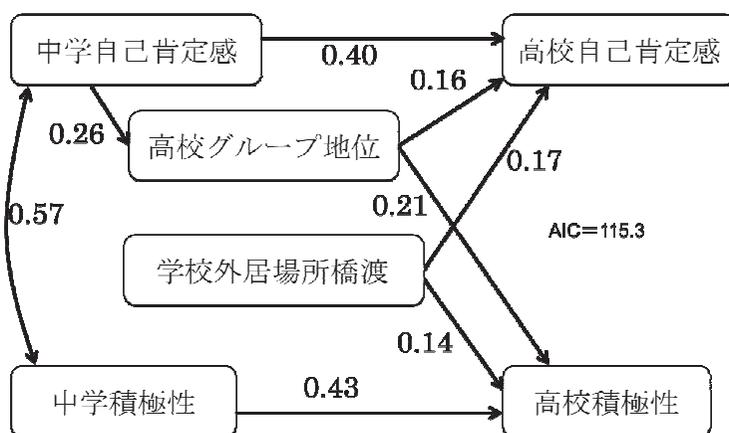


この図の左側の黒丸の地点にいる人物は、ふだんは所属する集団の中で濃厚な人間関係を形成しているが（星形）、他のグループとの橋渡しも担っている（点線）。この点線のような人間関係が社会の中でどのように広がっているかを示すのが、橋渡し型のソーシャルキャピタルである。

私たちは、このような橋渡し型の人間関係が学校外に広がることに、中高の閉じがちな人間関係によって形成された自己認識と行動原則を解きほぐしていく効果があるのではないかと考えた。

こうした仮説に基づき宇都宮大学教育学部において調査を行った結果、次のような結果が得られた。小原、川崎（2018）では重回帰分析の結果のみのせてあるが、同じデータに基づきパス解析を行ったのが図3である。高校の自己肯定感や積極性に影響を与えている可能性のある変数として、図の中にある「高校グループ地位」「学校外居場所橋渡し」だけでなく、学校外の承認型の居場所も変数として含めていたが、有意の影響を与えていなかったので取り除いてある。「学校外居場所橋渡し」の代わりに、「学校外に居場所がありますか」という質問を入れた場合にも、有意の影響は見られなかった。

図3 中学から高校への自己肯定感、積極性へのスクールカーストおよび学校外居場所の影響



この結果からわかるのは、①自己肯定感は、高校で所属するグループの地位を通じて、中学から高校において悪循環を生じていること ②橋渡し型の居場所は、自己肯定感や積極性を高めていること

③ただ学校外に居場所があるというだけでは、自己肯定感を高めたり積極性を高めたりする効果はなく、承認型の居場所についても同様であることである。

本論文ではこれらのことを踏まえ、積極性や自己肯定感への中学・高校でのスクールカーストの悪影響をやわらげる力が、大学でフォーマルに所属する学科以外の居場所にあるかどうかの検証を行いたい。

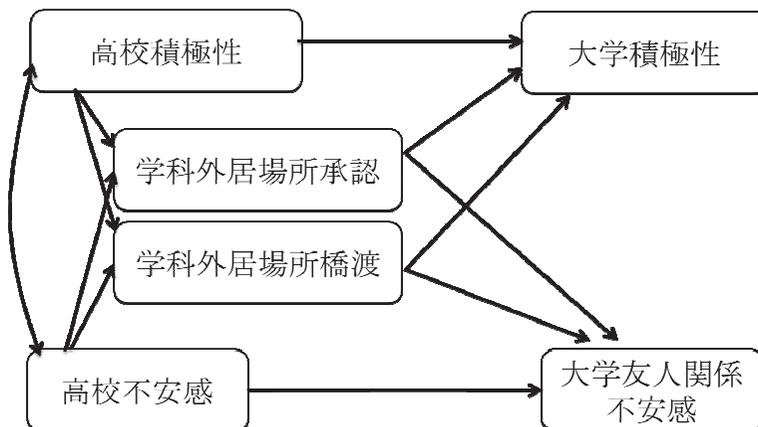
2 仮説

- 1 高校において「スクールカースト」で低い地位を経験したものは、高校時点で積極性や人間関係への安心感が低い傾向が見られ、大学に入ってもそうした性格が継続している。
- 2 高校において積極性や人間関係への安心感が低かったものも、大学で学科外に居場所があれば、それらが高くなる
- 3 単に学科外に居場所があるというだけでなく、その居場所では広い意味で仲間から承認されていたり、新しい人間関係を広げていけば、積極性や人間関係への安心感はいっそう高くなる

上記の仮説にもとづき次のようなモデルをたて、パス解析により検証を行う。

高校積極性、高校不安感については、高校時代を振り返ってもらった質問を因子分析にかけ、出てきた因子を用いることとする。大学についても同様。学科外居場所については、まず学科外の居場所があったかどうかの影響を見たいうえで、学科外の居場所があったものについて、その居場所に関する設問を因子分析にかけ、出てきた二つの因子をもとに作成した変数を説明変数として用いる。

図 4 分析モデル



3 方法

調査は宇都宮大学教育学部（学校教員養成課程）において、必修のクラス授業を用い、アンケートを配布することによって行った。アンケートの本文は川崎（2018）を参照。アンケートの調査時期は2017年11月～12月。アンケートの回答者は教育学部学校教員養成課程1年生147名（全173名）、同2年生105名（全172名）。1年と2年のサンプルで男女の偏りはなかった。

4 結果

4-1 高校時点での積極性と、不安尺度

設問5「高校のクラスでのあなたについてお聞きします（アからキは2件法、クからサは4件法）11項目のうちの10項目について因子分析（主因子法）を行う。（コ、クラスでは人気がある方だったの項目はスクールカーストにおける位置を測るために用いたため、ここでは除いた）

設問は以下の通り

5 【高校のクラス】でのあなたについてお聞きします

- | | |
|-----------------------------|----------------------|
| ア、人と話すことが苦手だった | イ、小さいことを気にしていた |
| ウ、周囲になじめなかった | エ、自分の意見は言うほうだった |
| オ、よく先生に注意されていた | カ、自信がなくて落ち込むことがよくあった |
| キ、仲間はずれをしたことがあった | ク、いつも同じ人と話をしていた |
| ケ、学校での人間関係が失敗しないよう、強く心がけていた | |
| サ、学校にはポジティブなイメージがあった | |

スクリープロットにより二因子を選択、プロマックス回転を行った。共通性の低かった設問（0.1未

満)を削除した結果、下記の6設問だけが残った(表1)。

表1 「高校のクラスでのあなたについてお聞きします」因子分析 パターン行列

| | 因子1 | 因子2 |
|-----------|-------|--------|
| カ 自信ない | 0.788 | |
| イ 小心 | 0.703 | |
| サ 学校ポジティブ | | -0.591 |
| エ 積極的意見 | 0.14 | -0.501 |
| ウ なじめない | 0.167 | 0.432 |
| ク 同じ人と話 | | 0.365 |

累積寄与率30.5%、因子負荷0.1未満は非表示、因子間の相関係数0.4

第一因子への因子負荷の高かった設問2項目、第二因子への因子負荷の高かった設問4項目を選び、それぞれの点数を合計して、高校不安尺度、高校消極性尺度と名づけた。それぞれのクロンバックの α は0.708、0.485となった(表2、表3)。

表2 高校不安尺度に含まれた設問

- イ、小さいことを気にしていた
- カ、自信がなくて落ち込むことがよくあった

表3 高校積極性尺度に含まれた設問

- ウ、周囲になじめなかった(逆転)
- エ、自分の意見は言うほうだった
- ク、いつも同じ人と話をしていた(逆転)
- サ、学校にはポジティブなイメージがあった

4-2 高校時点での積極性と不安尺度に対する、クラス内での位置づけや所属グループの位置づけの影響

4-1で作成した二つの変数に対するスクールカーストの影響を測るために、

5 【高校のクラス】でのあなたについてお聞きします

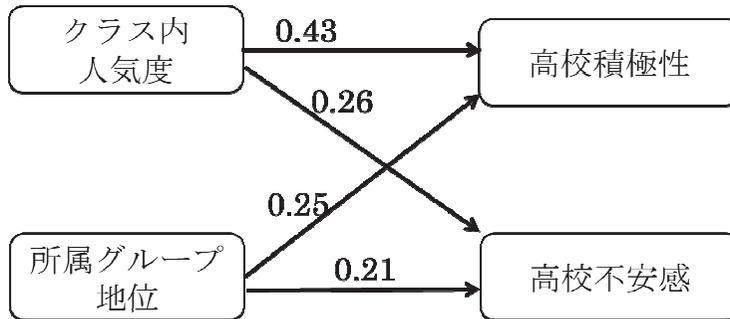
コ、クラスでは人気がある方だった(4件法)
の質問により「クラス内人気度」を測り、

6 高校時代の学校の環境についてお聞きします

- ① スクールカーストはありましたか？
 1. はっきりとあった
 2. なんとなくはあった
 3. 全くなかった
- ② ①で1または2と答えた方にお聞きします。自分の所属するグループは、クラスでどの位置にいて感じていましたか？(発言力、存在感など)
 1. どちらかといえば上の方
 2. 中くらい
 3. どちらかといえば下の方

の②の質問より「所属グループ地位」を測り、この二つを説明変数として4-1の高校不安尺度、高校消極性尺度それぞれに対して、重回帰分析を行った(図5)。

図5 クラス内人気度、所属グループ地位を独立変数とし、高校積極性および高校不安感をそれぞれ従属変数とした重回帰分析結果



高校積極性を従属変数としたとき、クラス内人気度と所属グループ地位の標準偏回帰係数は0.43、0.25となった(決定係数0.40)。同様に、高校不安感を従属変数としたとき、クラス内人気度と所属グループ地位の標準偏回帰係数は0.26、0.21となった(決定係数0.14)(すべて有意水準は0.01%)。この結果により、高校積極性や高校不安感(クラス内での地位という意味での)スクールカーストの影響を受けていることが示された。

4-3 大学時点での積極性と、友人関係不安

次に従属変数を作成するために、設問10「現在のあなたについてお答えください(4件法)」31項目について、因子分析(主因子法)を行う。

- ①初対面の人との会話は苦痛でない
- ②自分が詳しくないジャンルの話題にもついていくことができる
- ③大学を卒業し、社会に出て新しい人と出会うことは楽しみだ
- ④自分から人を遊びや食事に誘う方だ
- ⑤学科やサークルは一緒だが、あまり親しくない人とでも挨拶をする方だ
- ⑥学科などは同じだが、関わりのない人とグループ活動や食事会などで一緒にいることはポジティブにとらえる方だ(仲良くなるチャンスなど)
- ⑦興味がなくても、黙って相手の話を聞くことができる
- ⑧自分で悪いと思ったことはしない
- ⑨他人と違う意見でも言うことができる
- ⑩間違っていると思ったら、友人を注意できる
- ⑪忘れ物をした友人や、欠席をした分のノートがない友人など、困っている友人がいたら積極的に助ける
- ⑫知らない人が物を忘れたり、落としたりした場合など、自分と関わりを持つ可能性がない人が困っているところを見かけても積極的に助ける
- ⑬仲の良い友人が、だれかを無視しようと思ったら従うと思う
- ⑭自分とタイプの違う人(グループや性格の明るさ、テンションや考え方の異なる人)でも壁を作らない

- ⑮仲間外れにされても仕方ないと思う人がいる
- ⑯自分には、優れた部分や、人に好かれる部分があると思う
- ⑰友人の小さな態度の変化から、自分に対する感情が不安になる
- ⑱仲の良い友人でも、自分を嫌いになるのではと不安になることがある
- ⑲仲のよいグループの友人と仲たがいた場合、自分は一人になると思う
- ⑳多くの友人と付き合うより、数少ない友人を大事にするほうだ
- ㉑現在幸福だと感じる
- ㉒自分の出身地に愛着がある
- ㉓一人でいることは何とも思わない
- ㉔少しのことで深くなやむ
- ㉕物事の良い面に目が向く方だ
- ㉖落ち込みやすい
- ㉗約束は守る方だ
- ㉘真面目に努力する方だ
- ㉙好奇心旺盛だ
- ㉚周囲の評価を気にする
- ㉛ツイッターなどのSNSをよく利用する

スクリープロットにより二因子を選択、プロマックス回転を行った。共通性の低かった設問（0.1未満）を削除した結果、次のような因子が得られた（表4）。

表4 「現在のあなたについてお答えください」因子分析 パターン行列

| | 因子1 | 因子2 |
|------------|-------|--------|
| ⑥仲良くなるチャンス | 0.64 | |
| ①初対面平気 | 0.63 | |
| ③新しい人の出会い | 0.601 | |
| ㉙好奇心 | 0.579 | |
| ㉑幸福 | 0.578 | |
| ㉕良い面 | 0.536 | |
| ②広いジャンル | 0.522 | |
| ⑭壁作らない | 0.518 | |
| ④遊び食事誘う | 0.517 | |
| ⑯自信 | 0.509 | |
| ⑤親しくない人挨拶 | 0.489 | |
| ⑫見知らぬ助ける | 0.48 | |
| ㉗約束守る | 0.444 | 0.171 |
| ⑪友人助ける | 0.433 | |
| ⑨違う意見言う | 0.415 | -0.16 |
| ㉘まじめに努力 | 0.403 | |
| ⑩友人注意 | 0.398 | -0.111 |

| | | |
|----------|--------|-------|
| ⑳地元愛着 | 0.375 | 0.102 |
| ㉑話を聞く | 0.349 | |
| ㉒悩みがち | | 0.774 |
| ㉓友人感情不安 | | 0.745 |
| ㉔友人嫌い不安 | | 0.724 |
| ㉕落ち込みやすい | | 0.714 |
| ㉖評価気にする | 0.115 | 0.673 |
| ㉗仲違一人選択 | -0.132 | 0.421 |
| ㉘SNS | 0.14 | 0.357 |

累積寄与率30.5%、因子負荷0.1未満は非表示、因子間の相関はほとんど見られなかった（相関係数-0.05）

第一因子への因子負荷の高かった設問10項目（負荷量0.5以上）、第二因子への因子負荷の高かった設問5項目（負荷量0.5以上）を選び、それぞれの点数を合計して、大学積極性尺度、大学友人関係不安尺度と名づけた。それぞれのクロンバックの α は0.830、0.848となった（表3、表4）。

表5 大学積極性尺度に含めた設問

- ①初対面の人との会話は苦痛でない
- ②自分が詳しくないジャンルの話題にもついていくことができる
- ③大学を卒業し、社会に出て新しい人と出会うことは楽しみだ
- ④自分から人を遊びや食事に誘う方だ
- ⑤学科などは同じだが、関わりのない人とグループ活動や食事会などで一緒にいることはポジティブにとらえる方だ（仲良くなるチャンスなど）
- ⑥自分とタイプの違う人（グループや性格の明るさ、テンションや考え方の異なる人）でも壁を作らない
- ⑦自分には、優れた部分や、人に好かれる部分があると思う
- ⑧現在幸福だと感じる
- ⑨物事の良い面に目が向く方だ
- ⑩好奇心旺盛だ

表6 大学友人関係不安尺度に含めた設問

- ①友人の小さな態度の変化から、自分に対する感情が不安になる
- ②仲の良い友人でも、自分を嫌いになるのではと不安になることがある
- ③少しのことで深くなやむ
- ④落ち込みやすい
- ⑤周囲の評価を気にする

4-4 承認的居場所と、橋渡しの居場所

居場所の性格に関する変数を作成するため、設問9「8の③で学科以外に居場所があると答えた方にお聞きします。その居場所で以下のような経験はありましたか（③～⑤のみ2件法、他は4件法）」

の10項目について、因子分析(主因子法)を行う。

- ①初対面の人と出会う機会があった
- ②いつも同じメンバーといることが多かった
- ③もし嫌になったらすぐやめるか続けるかは自分の自由にできた
- ④自分から積極的に人に話しかけることができた
- ⑤学科のグループにいないような人と仲良くなることができた(例 学科で親しい友達はみんなおとなしいが、サークルにはテンションが高い友達がいるなど)
- ⑥チームワークを大切にする場所だった
- ⑦人間関係は、学科の中だけでなく、居場所にもあると安心することがあった
- ⑧仲間から褒められたり、認められたりすることがあった
- ⑨学科よりも明るい、積極的、自信が持てるなど生き生きとした自分だった
- ⑩役職についたり、リーダーシップを発揮したりする機会があった

スクリープロットにより二因子を選択、プロマックス回転を行った。共通性の低かった設問はなかった(表7)。

表7 学科以外の居場所での経験因子分析 パターン行列

| | 因子1 | 因子2 |
|---------------|-------|-------|
| ⑦ 安心できる | 0.801 | |
| ⑧ 認められる | 0.79 | |
| ⑥ チームワーク | 0.652 | |
| ⑨ 明るく積極的な別の自分 | 0.557 | 0.197 |
| ② いつも同じメンバー | 0.34 | 0.248 |
| ④ 積極的に話しかけ | | 0.804 |
| ⑤ 違うタイプの友人 | | 0.707 |
| ③ 自由にやめられる | 0.119 | 0.571 |
| ⑩ 役職やリーダーシップ | 0.17 | 0.552 |
| ① 初対面の機会 | 0.185 | 0.445 |

累積寄与率27.5%、因子負荷0.1未満は非表示、因子間の相関係数0.54

その結果、第一因子への因子負荷の高かった設問3項目(負荷量0.6以上)、第二因子への因子負荷の高かった設問3項目(負荷量0.57以上)を選び、それぞれの点数を合計して、居場所承認尺度、居場所橋渡し尺度と名づけた。それぞれのクロンバックの α は0.75、0.48となった(表8、表9)。

表8 居場所承認尺度に含まれた設問

- ⑥チームワークを大切にする場所だった
- ⑦人間関係は、学科の中だけでなく、居場所にもあると安心することがあった
- ⑧仲間から褒められたり、認められたりすることがあった

表9 居場所橋渡し尺度

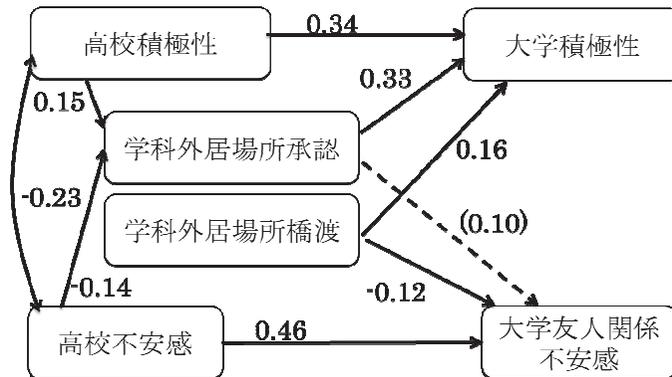
- ③もし嫌になったらすぐやめるか続けるかは自分の自由にできた
- ④自分から積極的に人に話しかけることができた
- ⑤学科のグループにいないような人と仲良くなることができた

4-5 高校から大学の積極性と不安尺度への居場所の影響

4-1で作成した高校不安尺度、高校消極性尺度、4-3で作成した大学積極性尺度、大学友人関係不安尺度、4-4で作成した学科外居場所承認尺度、学科外居場所橋渡し尺度を、図4のモデルに従ってパス解析を行った。その結果、二つのモデルが選ばれた。どちらにおいても学科外居場所橋渡し尺度への高校積極性と高校不安の有意の影響は見られなかったのだが、学科外居場所承認尺度、学科外居場所橋渡し尺度から大学友人関係不安感尺度への影響については微妙な結果となった。(学科外居場所がないという者は計算から除外している)。

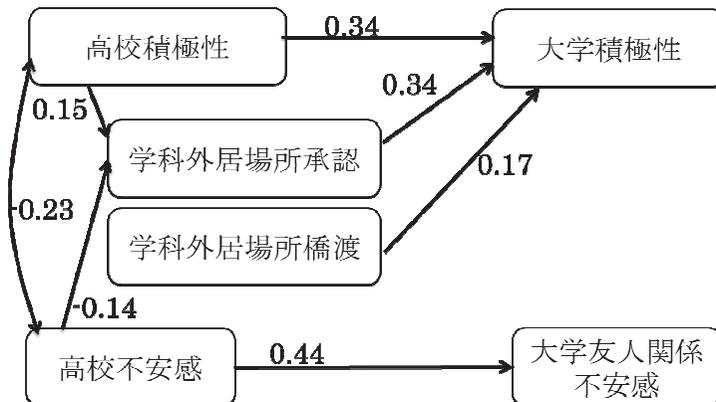
まず学科外居場所承認尺度、学科外居場所橋渡し尺度から大学友人関係不安感尺度への影響を含めたモデルを作成したところ、前者は10%水準での有意傾向、後者は5%水準で有意となった(標準化推定値はそれぞれ0.10、-0.12) AICは71.6。

図6 高校から大学の積極性と不安尺度への居場所の影響 モデル1



前者が5%有意水準を満たさなかったため、モデルから取り除いたところ、後者も有意水準5%を満たさなくなったため、両方を取り除いたのが次のモデルである。

図7 高校から大学の積極性と不安尺度への居場所の影響 モデル2



AICはモデル1よりも若干高くなり、72.1となった。

なお、学科外居場所承認尺度、学科外居場所橋渡し尺度の代わりに、「学科以外に居場所があった(サークル、ボランティア、アルバイト、習い事など)」という設問を用いた場合には有意な影響関係は見られなかった。

結論

中学から高校でのスクールカーストによって引き起こされると考えられる消極性から脱却し、大学で積極的な生活を送る上で、大学でフォーマルに所属している学科とは別に、承認的な性格を持っていたり、橋渡しのな人間関係を広げる居場所があることは、それぞれ効果的であることが示された。また橋渡しのな人間関係を広げる居場所に所属できるかどうかについては、高校からの人間関係の在り方をひきずらないこともわかった。これはつまり大学での環境整備によって、スクールカーストで失ったものを取り戻せる可能性があることを意味している。

またスクールカーストのもう一つの影響である、友人関係に対する不安感についてだが、橋渡しのな人間関係を広げる居場所が学科外にあることは、不安の解消に若干の効果があるかもしれない、逆に承認的な居場所があることはかえって友人関係の不安を高める効果があるかもしれない、という曖昧な結果となった。今後の調査研究でその効果をさらに検証していきたい。

平成30年9月27日受理

参考文献

- 川崎志織 2018「幅広い人間関係や所属集団を持つことの必要性について—幼児期の仲間集団・高校までの学校外の居場所・大学の環境と課外活動の観点から」宇都宮大学教育学部卒業論文
<http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/sociology/2018kawasaki.pdf>
- 小原一馬, 川崎志織 2018 「中高生における、学校外の居場所の新たな効用——橋渡し型人間関係が生むコミユカ/リア充」宇都宮大学教育学部教育実践紀要(5), 107-116
- 小原一馬, 平山愛理 2018「大学生における、中高時のスクールカースト経験の長期的影響」宇都宮大学教育学部研究紀要(68), 105-120
- 鈴木翔 2012『教室内(スクール)カースト』光文社
- 森口朗 2007『いじめの構造』. 新潮社.
- Gittel, R. and Vidal, A. 1998. Community organizing: Building social capital as a development strategy. Sage Publications

The effects of IBASHO (physical/psychological
comfortable space) for university students
—Solution for the long range bad influence of clique
hierarchy of middle school

KOHARA Kazuma, Kawasaki Shiori